

弟

小さな子どもの頃、
あなたが喧嘩に負けて、
擦り傷から血を流して帰って来ると、
私が代わりに行って、
あなたをやっつけたガキ大将と
取っ組み合いの喧嘩をした。

東京のたび重なる空襲の中、
住んでいた家が焼け落ちて、
あなたが死んだと想い込んで、
一晩中、祖母と泣いていたら、
朝、どこかから、
布団を運んで戻ってきてくれた。

おばあちゃんが亡くなって、
姉弟2人きりになり、
食料難で骨と皮になっても、
あなたのことだけは、
命をかけて守り通してきた。

結婚したあなたに子どもができず、
愛するあなたと義妹が、
「どうか幸せになつて欲しい」と願い、
自分のお腹を痛めて生んだ乳飲み子を
身が引き裂かれる苦痛も我慢し、
信頼して2人に預けた。

あなたが脳梗塞で倒れ、
明日をも知れぬ命となつて、

大腿骨の折れた足で、
雨の降る日にたった1人、
夢中で電車とタクシーを乗り継ぎ、
病院まで会いに駆けつけた。

顔が赤く腫上がり、
体中、管で繋がれた
変わり果てたあなたの耳元で、
か細い声で名前を呼んだら、
意識がないはずのあなたの左目から、
ぽつんと一粒の涙が流れ落ちた。

あなたの一生は、幸せだったかしら？
私は何か、
あなたを悲しませるようなことをしたかしら？

あなたがいなくなつて、
まるで、私自身が死んでしまったみたい。
毎朝、明るくかかってきた電話の声も、
もう2度と聴くことはできない。

公園にぼんやりと座つて、
ただひたすら、
あなたのことだけを考えて、
悲しみにくれていたい。

私が愛し、守り続けた弟が、
私をこの世界に残して、
私より先に逝ってしまったの。

満開の桜が咲く部屋

かつてその部屋で、
若い花嫁として暮らし始めたとき、
広く開いた窓から、
春には満開の桜が咲き競うのを
満ち足りた、幸せな気分で眺めていた。

かつてその部屋で、
愛する人と休日の朝食を食べるとき、
細長いバルコニーに
ピクニック用のテーブルと椅子を置いて、
公園の木々のざわめきを聞きながら、
和やかにブランチを楽しんでいた。

かつてその部屋で、
ホームパーティーをするとき、
狭いリビングルームに
いっぱいに置いたビリヤードを
長いキューが入りきらなくて、
窓を開けたり閉めたり工夫して、
みんなで笑いながらゲームしていた。

かつてその部屋で、
のんびりと土曜の午後を過ごすとき、
輝く陽射しを浴びて テニスで走り回った後の
充実した体の疲れを感じながら、
2つ並べて敷いた布団の上に
仲良くコロんと寝転がって、
大好きなマンガを心ゆくまで読みふけていた。

かつてその部屋で、
クリスマスを祝うとき、
キラキラ光るモールで飾り付けをして、

歌って踊るサンタの人形を騒がせ、
赤と緑の洋服で着飾って、
それぞれ分担した美味しいお料理を持ち寄り、
ささやかなプレゼントを交換し合って、
愉快的友人たちと、時間を忘れて盛り上がっていた。

かつてその部屋に、
旅行から帰ってくるとき、

「やっぱりうちが、一番いいね」と歌いながら、
いつもうきうきした気分でドアを開け、
スーツケースを放り出して、
コンビニで買ったおにぎりを頬張り、
我が家の心地よさを思いっきり噛みしめていた。

荒野の真ん中にあるテキサスのアパートからも、
「ああ、あの桜の咲く部屋に帰りたい」と、
遠い郷愁に、切ない想いを馳せていた。

それなのに、今、その部屋にあるのは、
辛く、苦しい、虚ろな思い出だけ。

本も読めず、TVも見られず、音楽も聴けず、
友人と電話でおしゃべりすることさえできない。
立っていることはおろか、
座っていることすら苦しくて30分と耐えられない。

朝起きてから、夜眠るまで、
永遠にも思えるほどの長い時間を
ただ、ひたすら激しい首の痛みや胸の苦しさに耐えながら、
たった1人、横になったまま、
愛する人が帰って来てくれるそのときを
狂おしいほどに、待ち焦がれていた。

無為に通り過ぎていった膨大な時間。

携帯メールに、毎日繰り返し入れ続けた言葉は、

「愛してる」「病気になってごめんね」

「愛してる」「きつと元気になるから許して」。

この言葉は、一刻でも早く病んだ妻の待つ家に帰ろうと、
必死で働いていたあなたの心に
ちゃんと届いていたのかしら？

さようなら。

私がかつて愛してやまなかった

春には満開の桜が見える、

愛する人と友人たちと過ごした

陽気でワクワクするような楽しさに満ち溢れ、

笑いと冗談が耐えることのなかった空間。

できることならこの部屋を

ずっと愛し続けて、生きていたかった。

美しいものを求めて

「美しい」とは、
外見が綺麗に整っていることではない。
内側から自然と滲み出る
人々を照らす太陽のような
不思議な輝きに満ちていること。

「愛する」とは、
相手を常に自分のそばに置き、
所有物のように可愛がることではない。
例え、自分の傍らから離れ、
寂しさを感じるがあっても、
愛する人が空を飛びまわれる自由を
心から嬉しいと感じられること。

「勇気」とは、
表だって、見えるものではない。
今ある現実をありのままに受け入れて、
けっして目を逸らさず、

逃げることもせずに
冷静に的確に少しずつ、
いろいろな問題を解決していくこと。

「正直」とは、
すべてをそのまま、伝えることではない。
自分は苦しんでも、
誰も傷つくことがないように、
思いやりをもって、
言うべきことを言い、
言うべきでないことは、
そっと胸にしまっておくこと。

どこかにあるかもしれない

「美しいもの」を求めて、

私の心は、

オレンジ色の金木犀が、

甘い香りを放ち始めた

ロミオのバルコニーを

ゆるりと

崩れた楕円を描きながら、

謳うように、滑るように、

音もなくなつたゆたつていく。